



TITLE:

京大広報 No. 620

AUTHOR(S):

京都大学広報センター

CITATION:

京都大学広報センター. 京大広報 No. 620. 京大広報 2007, 620: 2303-2322

ISSUE DATE:

2007-02

URL:

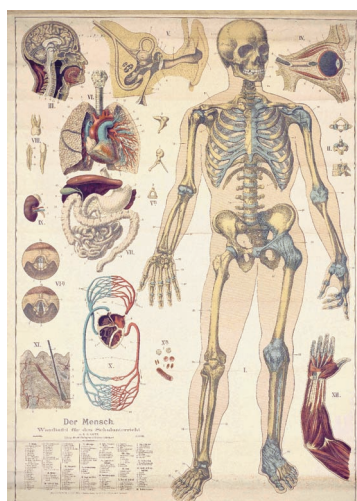
<http://hdl.handle.net/2433/196471>

RIGHT:

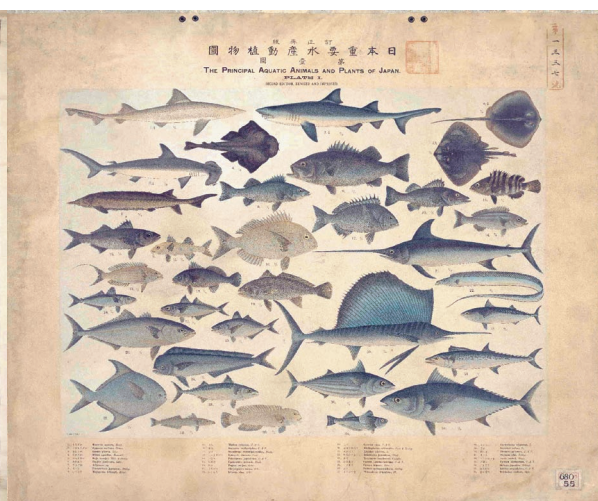
京大広報

No. 620

2007. 2



人体解剖図 学校教育用



訂正再版 日本重要水産動植物図 第一図
眼で学ぶ、絵で教える 京都大学所蔵近代教育掛図展
—関連記事 本文2319ページ—



薬用植物掛図 トリカブト図

目次

新しい教員組織について	
企画・評価担当理事・副学長 丸山正樹……	2304
〈大学の動き〉	
博士学位授与式……	2306
平成19年度概算要求内示概要……	2307
平成19年度入学者選抜学力試験(第2次学力検査)	
の志願状況……	2308
平成18年度定年退職予定教員……	2309
総長主催「外国人研究者との交歓会」の開催	
……	2312
〈部局の動き〉	
法科大学院シンポジウム「法科大学院教育の可能性	
—その発展のために—」について ……	2312
〈寸言〉	
一期一会	木瀬照雄……2313

〈随想〉	
健やかな美しい国づくり	
名誉教授 家森幸男……	2314
〈洛書〉	
説得術としてのレトリックの勧め 片柳榮一……	2315
〈話題〉	
「アトムサイエンスフェア講演会'06」を開催	
……	2316
〈訃報〉……	2316
〈日誌〉……	2319
〈お知らせ〉	
眼で学ぶ、絵で教える 京都大学所蔵	
近代教育掛図展……	2319
平成18年度防災研究所研究発表講演会……	2320
〈隔地施設紹介〉	
理学研究科附属地球熱学研究施設……	2321

京都大学広報センター

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

新しい教員組織について

企画・評価担当理事・副学長 丸山 正樹

学校教育法の大学教員の組織、職名と職ごとの役割に関わる部分が改正され、本年(平成19年)4月1日に施行されます。何がどう変わり、本学はどうするかについて説明します。

1. 学校教育法と大学設置基準の改正

教員の組織、職名は現行の教授、助教授、講師、助手から教授、准教授、講師、助教、助手に変わります。それぞれの職務について、現行の学校教育法では

- (1)教授は、学生を教授し、その研究を指導し、又は研究に従事する
- (2)助教授は、教授の職務を助ける
- (3)助手は、教授及び助教授の職務を助ける
- (4)講師は、教授又は助教授に準ずる職務に従事する

と定めています。改正された学校教育法では

- (1)教授は、専攻分野について、教育上、研究上又は実務上の特に優れた知識、能力及び実績を有する者であって、学生を教授し、その研究を指導し、又は研究に従事する
- (2)准教授は、専攻分野について、教育上、研究上又は実務上の優れた知識、能力及び実績を有する者であって、学生を教授し、その研究を指導し、又は研究に従事する
- (3)助教は、専攻分野について、教育上、研究上又は実務上の知識及び能力を有する者であって、学生を教授し、その研究を指導し、又は研究に従事する
- (4)助手は、その所属する組織における教育研究の円滑な実施に必要な業務に従事する
- (5)講師は、教授又は准教授に準ずる職務に従事する

となります。注意深く読まないと教授、准教授、助教の違いが分からない定めですが、准教授と助教が教授に従属する者とは限らないと読めます。

学校教育法の今回の改正の基になった平成17年1

月の中央教育審議会大学分科会による「大学の教員組織の在り方について(審議のまとめ)」(以下「まとめ」という。)によると、今回の改正の眼目が、助手の職務内容と名称の見直しであることが分か



ります。実際、「まとめ」では平成8年大学審議会で「助手の職務内容や名称の見直し等を含めた教員組織の在り方について、今後、早急に検討を行う必要」を指摘されていること、平成13年の科学技術基本計画において「若手研究者の自律性向上の観点から、研究に関し、優れた助教授・助手が教授から独立して活躍することができるよう、制度改正も視野に入れつつ、助教授・助手の位置付けの見直しを図る」こととされていることが、改正の背景にあるとしています。さらに、「教員組織の在り方の見直しに当たっては、大学の教員組織が、各分野における特性に応じて、①教育研究を組織的に展開していくこと、②若手教員を養成していくことの両面について、一定の重要な役割を果たしてきていることを踏まえる必要がある」とした上で、具体的な検討の視点として

- ・現在の助手の職務の実態に照らし、自ら教育研究を行うことを主たる職務としている若手教員について、その職務に相応する位置付けを行うという観点
 - ・助教授についても、その実態に相応する位置付けを行うという観点
 - ・教育研究活動の組織的かつ効果的な実施や責任の所在の明確化の確保という観点
- などを挙げています。

「まとめ」では、現行の助手の職の位置付けが曖昧であるとして、「特に、将来の大学教員や研究者を志し、自ら教育研究を行うことを主たる職務とする者にとって、①助手が将来の教授等につながる職として明確に位置付けられていない、②自ら教育研究を

行うこと以外に、教育研究の補助や学科や講座の事務等の様々な職務を行う一因となっている、③自ら教育研究を行う大学教員と明確に位置付けられていないため授業科目の担当者になれない」等の問題は、この曖昧さによると分析しています。このため、助手の職については、職務内容等を勘案して区分することが必要で、助教の職を新設するとともに、(新)助手の主たる職務は教育研究の補助であると明確に位置づけています。

助教授についても、上記の視点にある通り、その職務の実態とその名称の国際的通用性からみて、新学校教育法にある職務の准教授を設けるとしています。准教授の職務内容は助教授と大きく違い、教授と同じ内容になっていますが、准教授の資格は現行の助教授と同じものとするのが適当であるとしています。最初に書きましたが、学校教育法上では教授、准教授、講師、助教の職務内容に差がないようになっていますが、「まとめ」には准教授が昇進して教授になる条件という間接的な表現で、教授は大学や学部等全体における教学面の運営全体についての第一次的な責務を担う者であると位置付け、さらに准教授の主たる職務に関する学校教育法上の規定振りは、教授と同じものとする一方、教授とは待遇やそれに関連した任用上の資格要件が異なる職とすべきであるとしています。

これらの役割の違いは本年4月1日施行予定の大学設置基準に、例えば「教育上主要と認められる授業科目については、原則として専任の教授又は准教授に担当させる」とし、「大学は、教員の適切な役割分担及び組織的な連携体制を確保し、かつ、教育研究上の責任体制が明確になるよう教員組織を編成するものとする」と定めています。しかし、新設置基準には具体的な職名ごとの役割分担と責任を規定しておらず、学科目制・講座制の規定を外し、組織設計は大学の自主性、自律性に任されています。この点も、今回の改正の重要な視点であると考えられます。「まとめ」では、「従来の講座制や学科目制は、人事、予算、教学面等の様々な側面において硬直的・閉鎖的な運用を招き、教育研究の進展等に応じた柔軟な組織編成や、各大学の自主的・自律的な取組を

阻害している」という指摘を挙げ、上記のような設置基準の改正を求めています。

2. 本学の対応

大学の教員組織に関わる制度改正に対応すべく、新制度の理念、具体的組織設計、他大学の検討状況などを調査した後、平成18年4月24日に役員会のもとに「教員組織の在り方等に関する検討ワーキング・グループ」を設置しました。本年4月1日の教員人事手続との関係で、早急に成案をまとめる必要があった、①助教授と准教授、助手と助教・(新)助手の関係、②適切な教員組織の在り方に関わる基本的な考え方について、先行して検討を進め、平成18年7月に報告書としてまとめ、部局長会議に諮りました。

報告の要旨は

- (1) 助教授は准教授に配置換する
 - (2) 研究を主たる職務としている助手は、原則として助教に配置換し、秘書業務、図書事務、情報機器・ネットワーク管理等に従事している助手は、原則として(新)助手に配置換する。現在各部局に配当されている助手ポスト(定数)は、将来にわたり、当該配当の枠内において、助教又は(新)助手のいずれにも使用できるものとする
 - (3) 講師は、准教授と助教の間にある職として、引き続き置く
 - (4) 教員の役割分担及び連携の組織的な体制を確保するための教員組織として、各部局に、講座、研究部門又はこれに代わる組織を置くこととし、これを引き続き全学規程において定める
- です。

ワーキング・グループの上記以外の検討課題は助教の処遇と教務職員の取り扱いです。「まとめ」では「助教の処遇は、助教が行う職務の実態に即し、各大学の判断により定めることが適当である」としながら、助教の職についても従来の職務を行う場合には処遇は変わらないと、当然のことしか言っていません。本学の場合、従来大学院教育において一定の役割を果たしている助手について給与に調整数1(所謂、大学院手当)を加算してきましたが、(経過措置を考慮しながら)(新)助手には調整数を当てない

ことにし、当面は助教の処遇は(調整数の扱いも含めて)現行の助手と同じとします。しかし、4月以降の助教の学部、大学院教育における職務の実態に応じて処遇を考えることにしています。その原資とするために、博士後期課程の学生を標準以上に指導している講師以上の教員に当ててきた調整数3を

(経過措置を講じながら)廃止することにしました。現行の教務職員のポストは、現職者の退職後に、助教に振り替えることができるものとしますが、教育研究活動を直接支援する職務については、現行の教務職員、技術職員が担っている職務と併せて、その在り方、体制をこれから検討していきます。

大学の動き

博士学位授与式

1月23日(火)午前10時30分から、時計台記念館国際交流ホールにおいて、尾池和夫総長、東山紘久理事・副学長(教育・学生担当)をはじめ、各研究科長・学舎長出席のもと、博士学位授与式が挙行された。

総長から、各授与者に対し学位記(平成18年11月24日付、同19年1月23日付)が手渡された後、総長

の式辞があり、午前11時30分に終了した。

各分野別内訳は左表のとおりである。

総長式辞は総長室ホームページをご覧ください。

http://www.kyoto-u.ac.jp/uni_int/01_sou/070123_1.htm

学 位	平成18年11月			平成19年 1 月		
	課程博士	論文博士	計	課程博士	論文博士	計
博士(文学)	5	4	9	7	—	7
博士(教育学)	—	—	—	1	1	2
博士(法学)	1	1	2	—	1	1
博士(経済学)	—	2	2	1	—	1
博士(理学)	4	1	5	5	1	6
博士(医学)	6	7	13	12	1	13
博士(社会健康医学)	1	—	1	—	—	—
博士(薬学)	—	—	—	—	2	2
博士(工学)	7	5	12	3	17	20
博士(農学)	7	9	16	1	9	10
博士(人間・環境学)	5	—	5	—	—	—
博士(エネルギー科学)	1	—	1	1	1	2
博士(地域研究)	—	—	—	—	—	—
博士(情報学)	4	2	6	2	1	3
博士(生命科学)	6	—	6	6	—	6
博士(地球環境学)	—	—	—	1	—	1
計	47	31	78	40	34	74



平成18年11月24日付け博士学位授与者



平成19年 1 月23日付け博士学位授与者

平成19年度概算要求内示概要

新規要求

1. 大学院医学研究科（修士課程の設置） 人間健康科学系専攻 修士課程 39人
2. 大学院薬学研究科（独立専攻の設置） 医薬創成情報科学専攻 修士課程 14人
博士課程 7人
教員の増 2人

3. 特別教育研究経費等

特別教育研究経費

概算要求区分	部 局 名	事 項（事 業）名	備 考
教 育 改 革	薬学研究科・薬学部	薬学フロンティア教育プログラム開発	継 続
	教育学研究科・教育学部	子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究推進事業	新 規
研 究 推 進	地域研究統合情報センター	地域情報資源の共有化と相関型地域研究の推進	継 続
	霊 長 類 研 究 所	リサーチ・リソース・ステーション(RRS) ー環境共存型飼育施設による新たな研究用霊長類創出プロジェクトー	継 続
	化 学 研 究 所	物質合成研究拠点機関連携事業(名古屋大学, 九州大学)	継 続
	再生医科学研究所	再生医科学研究所附属幹細胞医学研究センターにおける, 新たな ES 細胞(臨床応用 ES 細胞)樹立のプロジェクト研究	継 続
	ウ イ ル ス 研 究 所	新興・再興ウイルス感染克服研究連携事業	継 続
	化 学 研 究 所	超臨界二酸化炭素ナノポーラスエラストマー創製事業	継 続
	防 災 研 究 所	地震火山噴火予知計画研究事業	継 続
	医学研究科・医学部 医 学 部 附 属 病 院	次世代医療技術・創薬・臨床開発プロジェクト	新 規
	再生医科学研究所	幹細胞の臨床応用を目指す基盤研究に係る調査研究	新 規
	拠 点 形 成		
拠 点 形 成	生 存 圏 研 究 所	生存圏科学ミッションの全国・国際共同利用研究拠点形成	継 続
	防 災 研 究 所	災害に関する学理と防災の総合的対策のための研究推進事業	継 続
	基礎物理学研究所	基礎物理学分野横断型全国共同研究	継 続
	数 理 解 析 研 究 所	無限解析共同研究	継 続
	原 子 炉 実 験 所	原子力科学の先導的な応用分野の開拓	継 続
	霊 長 類 研 究 所	霊長類の生物学的特性の学際的研究	継 続
	放射線生物研究センター	放射線生物学研究の推進拠点	継 続
	生態学研究センター	生態学における共同研究	継 続
	基礎物理学研究所	クォーク・ハドロン科学の理論研究の新たな展開を目指す国際共同研究プログラム	新 規
連 携 融 合	経 済 研 究 所	先端政策分析連携推進機構の設置	継 続
	医学研究科・医学部	ポストゲノム研究の国際共同研究事業	継 続
	こころの未来研究センター(仮称)	こころに関する総合的研究の推進	新 規
特 別 支 援	生 存 圏 研 究 所 生態学研究センター	DASH システム	新 規

国立大学財務・経営センター施設費貸付事業

区 分	部 局 名	事 項（事 業）名	備 考
病院特別医療 機 械 整 備 費	医学部附属病院	総合医療治療システム	
	医学部附属病院	診療支援高度生理機能検査総合システム	

学年進行分

1. 学年進行教員相当数

医学部・保健学科 8人

(財務部)

平成19年度入学者選抜学力試験(第2次学力検査)の志願状況

2月25日(日)～27日(火)および3月12日(月)に実施される平成19年度入学者選抜学力試験の志願状況は以下のとおりです。

志願票の受付は、1月29日(月)から2月6日(火)まで、各学部で行われました。

学 部			募集人員	志願者数	倍 率	(参考) 前 年 度 最 終			
						募集人員	志願者数	倍 率	
総 合 人 間 学 部	前	期	120 [△]	393 [△]	3.3	105 [△]	378 [△]	3.6	
		文 系	65	241	3.7	55	198	3.6	
		理 系	55	152	2.8	50	180	3.6	
文 学 部	前	期	220	629	2.9	190	577	3.0	
教 育 学 部	前	期	60	205	3.4	40	164	4.1	
		文 系	50	178	3.6				
		理 系	10	27	2.7				
法 学 部	前	期	320	867	2.7	300	886	3.0	
経 済 学 部	前	期	230	814	3.5	210	784	3.7	
		一 般	180	512	2.8	160	503	3.1	
		論 文	50	302	6.0	50	281	5.6	
理 学 部	前	期	311	812	2.6	280	857	3.1	
医 学 部	前	期	223	604	2.7	213	618	2.9	
	後	期	20	146	7.3	20	183	9.2	
医 学 部	医 学 科	前	期	100	344	3.4	90	344	3.8
		後	期	123	260	2.1	123	274	2.2
	保 健 学 科	前	期	20	146	7.3	20	183	9.2
		後	期	63	122	1.9	63	142	2.3
	看 護 学 専 攻	前	期	7	47	6.7	7	80	11.4
		後	期	30	74	2.5	30	77	2.6
	検 査 技 術 専 攻	前	期	7	51	7.3	7	53	7.6
		後	期	15	37	2.5	15	39	2.6
	理 学 療 法 学 専 攻	前	期	3	19	6.3	3	25	8.3
		後	期	15	27	1.8	15	16	1.1
	作 業 療 法 学 専 攻	前	期	3	29	9.7	3	25	8.3
		後	期						
薬 学 部	前	期	80	223	2.8	70	184	2.6	
	薬 科 学 科		50	113	2.3	44	114	2.6	
	薬 学 科		30	110	3.7	26	70	2.7	
工 学 部	前	期	955	2221	2.3	857	2224	2.6	
	地 球 工 学 科		185	464	2.5	166	465	2.8	
	建 築 学 科		80	190	2.4	72	238	3.3	
	物 理 工 学 科		235	522	2.2	211	492	2.3	
	電 気 電 子 工 学 科		130	267	2.1	117	326	2.8	
	情 報 学 科		90	225	2.5	81	240	3.0	
	工 業 化 学 科		235	553	2.4	210	463	2.2	
農 学 部	前	期	300	634	2.1	233	581	2.5	
合 計			2839	7548	2.7	2518	7436	3.0	
		前	期	2819	7402	2.6	2498	7253	2.9
		後	期	20	146	7.3	20	183	9.2

(注) 1. 法学部と経済学部(一般)の募集人員は、外国学校出身者のための選考各10名以内を除く。

2. 前年度の募集人員、志願者数、倍率は、医学部保健学科を除き前期日程のみを表示。

(学生部)

平成18年度定年退職予定教員

京都大学定年規程により、次の教員（教授56名、助教授13名、助手6名）が、本年3月31日付けで退職の予定です。

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
教育学研究科	岡 田 康 伸	臨床教育学専攻 心理臨床学講座	心理臨床学に関する研究、心理療法特に箱庭療法に關しての基礎的研究から、人類学的な研究まで広げている
法学研究科	棚 瀬 孝 雄	法政理論専攻 法理論講座	司法制度や弁護士、現代法理論、比較法文化、法の解釈など、社会の中での法の働きの実証的・理論的研究
〃	大 嶽 秀 夫	法政理論専攻 政治史講座	1980年代以降の日本政治の動向、特に、行政改革と政党再編の政治過程とその影響に関する研究
経済学研究科	橘 木 俊 詔	経済動態分析専攻 市場動態分析講座	経済学の理論に基づいた実証分析と政策論議
〃	上 總 康 行	現代経済・経営分析専攻 市場・会計分析講座	会計学、特に管理会計学に関する日米比較研究
理学研究科	西 田 吾 郎	数学・数理解析専攻 表現論代数構造論講座	代数的位相幾何学の研究
〃	田 中 良 和	附属地球熱学研究施設	火山性磁場変化の研究・電磁気的手法による地下構造の研究
〃	須 藤 靖 明	〃	火山地域における地震の研究
〃	田 澤 雄 二	物理学・宇宙物理学専攻 宇宙放射学講座	中性子放射化分析等による宇宙塵・隕石の化学的研究、加速器質量分析による宇宙線永年変化と年代測定の研究
〃	山 本 文 子	化学専攻 物性化学講座	クロマトグラフィーにおける溶質、固定相、移動相間の相互作用の解析を基とした分析条件最適化の基礎的研究
医学研究科	和 田 洋 巳	医学専攻 器官外科学講座	呼吸器外科学全般に関する研究、移植医療における臓器保存のET-KYOTO液の開発発展的研究
〃	川 西 美知子	医学専攻 感染・免疫学講座	EBウイルスによる発がん機序に関する研究
薬学研究科	本 多 義 昭	創薬科学専攻 薬品創製化学講座	薬用植物の多様性、二次代謝機能発現に関する研究、生薬ならびに薬用植物に含まれる生理活性成分の研究
工学研究科	芦 田 讓	社会基盤工学専攻 地殻工学講座	反射法地震探査の高精度に関する研究、物理探査技術の土木・岩盤分野への適用に関する研究
〃	武 田 信 生	都市環境工学専攻 環境デザイン工学講座	廃棄物からの資源・エネルギー回収ならびに処理に伴う環境負荷の低減に関する研究
〃	酒 井 哲 郎	都市環境工学専攻 ウォーターフロント環境工学講座	海岸環境、特に海岸波浪に関する研究
〃	樋 口 忠 彦	都市環境工学専攻 総合環境学講座	景観学を構築し、成り立たせるための研究
〃	久 保 愛 三	機械理工学専攻 機械力学講座	機械的動力伝達技術に纏わる、空間幾何学、機構学、機械設計、生産、精度測定、管理技術、等に関する研究
〃	土 屋 和 雄	航空宇宙工学専攻 航空宇宙力学講座	宇宙工学に関する研究、および非線形システム理論に関する研究
〃	森 島 信 弘	原子核工学専攻 量子物質工学講座	液体の冷中性子散乱、加速器中性子源、原子炉の物理と動特性に関する研究
〃	村 上 正 紀	材料工学専攻 材料プロセス工学講座	半導体デバイス用の電子材料の研究・開発
〃	牧 正 志	材料工学専攻 材料機能学講座	鉄鋼材料およびチタン合金の組織制御および新機能創製に関する研究
〃	島 崎 眞 昭	電気工学専攻 電磁工学講座	計算電磁気学とハイパフォーマンス・コンピューティングの研究
〃	中 辻 博	合成・生物化学専攻 合成化学講座	量子化学基礎理論の構築と、励起分子、磁性化学、生物、および表面に関する量子的化学概念と理論の展開

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
工 学 研 究 科	増 田 弘 昭	化学工学専攻 化学システム工学講座	微粒子工学, 粉体工学, エアロゾル工学, ならびに粒子系基礎現象に関する研究
〃	山 田 春 美	都市環境工学専攻 環境システム工学講座	消毒副生成物の分析技術と評価手法の開発に関する研究, オゾンを用いた水処理技術の開発と評価に関する研究
〃	田 邊 晃 生	材料工学専攻 材料プロセス工学講座	冶金反応の物理化学, 環境材料のプロセス設計および微量成分・化学状態の分析に関する研究
農 学 研 究 科	大 西 近 江	応用生物学専攻 資源植物科学講座	ソバ野生祖先種の発見と起原地の確定, 新種野生ソバの発見と系統分類学的研究, 栽培ソバの集団遺伝学的研究
〃	矢 野 秀 雄	応用生物学専攻 動物機能開発学講座	動物栄養科学に関する研究, 特に肉用牛の栄養・飼養学ならびに肥育の生理・生化学に関する研究
〃	青 山 咸 康	地域環境科学専攻 地域環境開発工学講座	農業水利施設の構造工学(設計・施工・維持管理・耐震性能)
〃	三 野 徹	地域環境科学専攻 地域環境管理工学講座	流域水循環の制御と管理に関する研究
〃	大 東 肇	食品生物学専攻 食品生命科学講座	生活習慣病予防性食因子をはじめとする生理活性天然物質の構造と機能に関する研究
〃	鳥 井 清 司	地域環境科学専攻 比較農業論講座	衛星画像による世界の大規模灌漑地域の土地利用変化解析
〃	牛 野 正	地域環境科学専攻 地域環境管理工学講座	農村計画に関する研究
〃	加 藤 宏 郎	地域環境科学専攻 生物生産工学講座	農産物の熱的・電気的・光学的物性と品質評価への応用研究
人 間・環 境 学 科 研 究	鯨 岡 峻	共生人間学専攻 人間社会論講座	人間の生涯発達過程に関する世代間関係の研究
〃	長 屋 政 勝	共生文明学専攻 現代文明論講座	近代ドイツにおける国家社会統計ならびに社会統計理論の形成と展開に関する歴史的研究
〃	福 井 勝 義	共生文明学専攻 文化・地域環境論講座	焼畑・牧畜社会における民俗生態, 品種の多様性と文化の共進化, 民族間関係と戦いに関する文化人類学的研究
〃	愛 宕 元	共生文明学専攻 歴史文化社会論講座	中国中世・近世史研究
〃	玉 田 攻	相関環境学専攻 自然環境動態論講座	鉱物学, X線結晶学, 材料科学であり, 物質の合成とX線による構造決定, 物質の結合エネルギーの理論計算等
〃	富 田 博 之	相関環境学専攻 物質相関論講座	非平衡現象の統計物理学的研究
エ ネ ル ギ ー 科 学 研 究 科	富 井 洋 一	エネルギー応用科学専攻 エネルギー応用プロセス学講座	高機能材料の機器分析による研究, 科学技術史の研究
情 報 学 研 究 科	中 村 行 宏	通信情報システム専攻 集積システム工学講座	大規模・高性能情報回路のアーキテクチャと方式設計技術に関する研究
〃	沼 田 邦 彦	社会情報学専攻 生物圏情報学講座	リモセン及びGIS等を用いた生物圏情報の収集・解析法, 意志決定システム等による持続的資源管理法の研究
地 球 環 境 学 堂	松 井 三 郎	地球親和技術学廊	水質汚濁防止, 生態系毒性学, 上下水道学, 産業用排水技術, 廃棄物処理処分, 地球環境倫理学に関する研究
〃	中 原 紘 之	資源循環学廊	沿岸生態系における生物相互作用の解明とさまざまな人為的攪乱の影響に関する研究
医 学 部	福 田 耕 治	保健学科 検査技術科学専攻	核磁気共鳴法を用いた極低温物理学の研究, NMR顕微鏡の開発
化 学 研 究 所	福 田 猛	材料機能化学研究系	高分子の合成と物性に関する物理化学的研究
〃	坂 田 完 三	生体機能化学研究系	茶の香気生成の分子基盤に関する研究
〃	高 野 幹 夫	附属元素科学国際研究センター	磁性, 超伝導性, 強誘電性, 蛍光性を示す遷移金属酸化物に関する固体化学的研究

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
化 学 研 究 所	佐々木 義 弘	環境物質化学研究系	非線形化学反応系の挙動に関する研究
エ ネ ル ギ ー 理 工 学 研 究 所	吉 川 潔	エネルギー生成研究部門	荷電粒子エネルギーの直接エネルギー変換，ならびに 超小型核融合装置の先端技術応用に関する研究
〃	山 寄 鉄 夫	〃	量子放射エネルギーに関する研究
生 存 圏 研 究 所	深 尾 昌一郎	生存圏診断統御研究系	大気レーダーの開発と応用による地球大気圏力学に関する研究
防 災 研 究 所	高 山 知 司	気象・水象災害研究部門	海岸災害の防御と海岸・港湾構造物の性能設計法に関する研究
〃	梅 田 康 弘	附属地震予知研究センター	地震発生と地震予知に関する研究
〃	佐 々 恭 二	附属斜面災害研究センター	地すべりダイナミクスの研究
〃	池 淵 周 一	附属水資源環境研究センター	降水・流出系の観測とモデル化による河川流況の予測 および治水・利水計画とダム操作のシステム論的研究
〃	赤 松 純 平	社会防災研究部門	地震動特性ならびに堆積盆地構造に関する応用地球 物理学的研究
〃	渡 辺 邦 彦	地震防災研究部門	多項目総合観測による活断層挙動と内陸地震予知に関する研究，及び地域防災への地震情報の利活用の研究
〃	澤 田 豊 明	附属流域災害研究センター	山地流域における出水と土砂流出に関する研究
〃	上 野 鉄 男	〃	河川災害と洪水流に関する研究
ウ イ ル ス 研 究 所	下遠野 邦 忠	がんウイルス研究部門	ヒトがんウイルスによる細胞増殖制御に関する研究
〃	伊 藤 維 昭	細胞生物学研究部門	細胞における蛋白質の構造形成と動態の制御機構に関する研究
経 済 研 究 所	上 原 一 慶	経済制度研究部門	現代中国の経済システムと社会構造に関する研究
〃	坂 井 昭 夫	〃	現代の国際経済関係に関する研究。軍事と経済の関連性を 探る研究。知的財産権の経済的意義を解明する研究
〃	藤 田 昌 久	複雑系経済研究センター	空間経済学の動学的研究
原 子 炉 実 験 所	中 込 良 廣	原子力基礎工学研究部門	核分裂機構解明に関する実験研究並びに物理化学的および核不拡散政策の観点に立った核物質管理に関する研究
〃	木 村 康 洋	〃	原子炉ゆらぎの統計的解析および研究用原子炉の異常を 同定するシステムの開発
霊 長 類 研 究 所	相 見 満	進化系統研究部門	霊長類の分類と分布，進化史の研究，霊長類の共通祖先 復元に関する研究，特に，夜行性起源説の批判的検討
学 術 情 報 メ デ ィ ア セ ン タ ー	森 義 昭	連携研究部門	遠隔地における動植物生体系のオンラインモニタリング システムの研究・開発
放 射 線 生 物 研 究 セ ン タ ー	丹 羽 太 貫	晩発効果研究部門	放射線により誘発される非標的・遅延突然変異誘発の研究
総 合 博 物 館	城 下 莊 平		京都大学に遺された技術史資料を中心とする技術史研究，及び， 近畿の産業遺産に関する研究
フ ィ ー ル ド 科 学 教 育 研 究 セ ン タ ー	竹 内 典 之	森林生物圏部門	森林資源とくに管理圧の低下から劣化が進行している 人工林や二次林資源の保全に関する研究
〃	田 中 克	里域生態系部門	海産硬骨魚類の個体発生初期における生理生態に関する研究

(人事部)

総長主催「外国人研究者との交歓会」の開催

総長主催の「外国人研究者との交歓会」が平成18年12月22日(金)に時計台記念館国際交流ホールにおいて開催された。この交歓会は、本学において教育、研究に従事している外国人研究者と、総長をはじめとする本学関係教員とが交流を深めることを目的に毎年開催されているもので、今年度も約200名が出席する盛大なものであった。交歓会では、尾池和夫

総長からの挨拶の後、外国人研究者を代表して工学研究科の客員教授 Polprasert Chongrak アジア工科大学教授から挨拶があり、西村周三理事・副学長の乾杯の発声の後、談笑の輪が広がり、盛会のうちに閉会した。

(国際部)



挨拶する Chongrak 工学研究科客員教授



外国人研究者と歓談する尾池総長

部局の動き

法科大学院シンポジウム「法科大学院教育の可能性—その発展のために—」について

法学研究科法曹養成専攻(法科大学院)では、平成16年度から、法科大学院等専門職大学院形成支援プログラム(大学改革推進等補助金)の援助を得て、実践的理論教育高度化プロジェクトを推進してきたが、1月26日(金)には京都ホテルオークラにおいて標記のシンポジウムを開催し、裁判官や弁護士を含む約90名の参加者を得て、プロジェクトの成果の一端を公表した。

法科大学院では、60名程度の学生を1クラスとした双方向・多方向型の授業方法を採用しているほか、多くの実務家(裁判官、検察官、弁護士)が教育にかかわるなど、従来の法学教育には見られない教育方法がとられている。また、リーガル・クリニック(法律相談)やエクスターンシップ(弁護士事務所での研修)などの実践型科目も開講されるなど、職業教育的色彩の濃い教育が行われている。シンポジウムでは、こうした新たな教育方法の試みについてそれぞれの法律分野(民事法、法曹実務、刑事法、公法)ごとに報告がなされるとともに、今後の法科大学院教育のあり方や、法曹養成制度のあり方にまで踏み込

んで活発な議論が行われた。

法科大学院教育は新たな試みであるだけに、教員に大きな負担を強いるものとなったが、高い教育効果を達成しているとともに、学部教育へのフィードバックや実務界との協力関係の構築といった副産物も生み出している。また、分野によっては、研究面においても大きな刺激となっている。しばらくは、なお試行錯誤が続くが、法科大学院教育は大きな可能性を秘めていると言える。



多数の専門家が参加したシンポジウムの様子

(大学院法学研究科)

寸言

一期一会

木瀬 照雄



私の大学生活後半の昭和43年、44年は、学生運動が全盛だった。教室が封鎖され授業は中断してしまう。それでも毎日大学に通うことを欠かさなかったのは、ウマの合う仲間に恵まれ、大学という場を介して、後々まで付き合い合える人的ネットワークを広げることができたからであろう。

当時、私は写真部に属していた。今となっては、どんな写真を撮っていたかより、部室で仲間と談義をしたり、酒を飲んで西部構内で騒いだことの方が鮮明に記憶に残っている。今も写真部OB会の交流は盛んだが、残念ながら私は幽霊OBになりつつあることを、この場をお借りし、お詫び申し上げたい。そういえばあの時、斜め前にあった応援団の部室前の廊下で寝転んでいた山元さんは、高校の先輩でもあったことから顔見知りだったが、現在は全日本空輸の社長に就かれている。夜のクラブ活動として今でも銀座界限でお付き合いいただいているが、大物は、当時から大物であった。

授業の遅れは教授の家を訪ねるなど、学ぼうと思えば、どんな状況下でも学べるものだ。テーマは忘れてしまったが、加藤秀俊助教授と研究室の仲間と一緒に追分(今は西軽井沢とよばれている)の別荘をお借りしてフィールドワークに出掛けたことが懐かしい。

卒業の年は、大阪万博が開催されたが、加藤助教授と懇意にされていた小松左京さんが万博をプロデュースされるとあって、私も万博の開催準備を手伝うこととなった。翻訳作業や資料の整備など、多くの貴重な経験をした。開幕前日、関係者に内覧が許されたが、4つのジェットコースター全てを制覇し、月の石や岡本太郎のモニュメントなど、見るもの全てが斬新かつ新鮮で、若い目には大いに刺激となった。世界中の人々を招き、あれだけの大イベントを切り盛りするのに、裏方の苦労は相当なものだったが、その一端でも担えたことは、とても良い思い出だ。

そして万博が開幕した日、私はTOTOに入社するため、郷里でもある北九州に帰った。以来、京都に住まいを構えたことはないが、7年前、大阪支社長を務めた時に、京都も管轄し、再び深く関わる機会を得た。御池通りにショールームも開設することが出来た。

ビジネスの目で見ると、京都という街は千年もの古くからの歴史を慮りながらも、新たな市民文化を次々と発展させ、前衛的な試みも臆さない気質を持ち合わせていると思う。京都発祥の優良企業も、伝統と最先端技術がうまく融合している企業ではなかろうか。

私の経営のあり方も、言えば京都に倣っている。TOTOならでの成長を願い、いかに舵を切るべきか、他社よりも抜きん出た価値をいかに創り出すかを考えるとき、まずは、過去に築き上げた強みが何かを見極めねばならない。過去の強みを生かしつつ、次代を先取りする新たな価値を生み出してこそ、お客様の支持が得られる。これが私の経営の基本方針だ。

こうして綴ると、私の人生は出会いや経験が、とても良い糧になっている。その時その場の出会いや選択が、後の私に影響を与え、全てに奏功しているといって過言でない。過去の出会いや出来事は誰にもあろうが、それを意識し、継続し、定着させねば、縁も続かなければ、良い糧にもならない。幸いにも私は、人との縁も経験も、無理なく楽しく継続することができたようだ。

最近、座右の銘を聞かれると「一期一会」と答えている。一般的で面白くないので、結婚式の祝辞などでは“出会いを大切に！”と平たく言うことにしている。まさに人との出会いの連鎖が自分を育て、思いがけないところで仕事にも繋がり、私の人生をより豊かにしてくれている。これからも人との出会いを大事にしていきたい。仕事においても、お客様との対話、社員との対話こそが基本要件と心得ている。

今年5月に、TOTOは創立90周年を迎える。折りしも、私は5度目の年男。この節目の年に新たな縁も増えよう。その一つ一つもまた、次の糧に結びつくよう、日々人に学び、世の変化に注目していこうと思っている。

(きせ てるお TOTO(東陶機器株式会社)社長 昭和45年教育学部卒)

随想

健やかな美しい国づくり

名誉教授 家森 幸男

「世界一受けたい授業」というテレビ番組を頼まれたので、自分にしか出来ない講義をやってみた。過去20余年を費やし地球上の61地域を自らめぐってわかった長寿の人々の食生活をお話した。



長寿国といえば、現在では平均寿命が、日本人女性が世界一、男性も上位3位以内、特に努力したわけでもないのに日本は世界屈指の長寿国になった。私どもは世界中でまる一日、24時間の尿を集め栄養のバイオマーカーを分析し、健診結果やその地域の疾患別死亡率を比較してその理由が分かって来た。

「人は血管と共に老いる」といわれるように、血管の病気の第一位、心臓を養う血管が詰まる心筋梗塞が多ければ長生きは無理。これが最も少ない先進国は日本で、カロリーを主に米から摂る米食圏は、まず血液のコレステロールは低く、肥満も少なく、したがって心臓死が少ない。さらに、大豆蛋白質やイソフラボン、それに魚介類のDHAなどの脂肪酸やアミノ酸、タウリンを多く摂取する地域では、心臓死も脳卒中も少ない。ただ、かつての日本人は白米が美味しい為に塩味の強い副菜だけで満足し、野菜や乳製品、食肉の摂取は不足しがちで、食塩の害をもろにうけ、高血圧から脳卒中になりやすかった。今でも平均寿命が長いのに脳卒中など脳血管障害からの寝たきり、認知症が多く、健康寿命を楽しめる長寿の人は少なく、これが日本の少子高齢社会の深刻な問題である。

自給率がわずか40%の最低の日本では、世界的に人口の爆発がおこりつつある今日、お金で世界中の大豆、魚、野菜などの食物を集めて生きるやり方には先がない。世界の長寿地域の共通点は、その風土に適した食材を大切に育て上手に活用してきたこと。モンスーン地帯の島国日本の風土に最適なのは稲作。周囲の海からの幸、国土の多くをしめる山からの幸の活用で、狭い国土での長寿と繁栄が可能になる。

世界的にも水に恵まれた日本の水源の山、その水を活用した稲作は土地を豊かにし、かつては畦も利用して作られた大豆のおかげで、栄養バランスの悪い白米を主に食べても日本人は長寿になりえた。そして魚の摂取のバイオマーカーである尿中のタウリンは世界中で比べても日本人は断トツに多い。これが多い程、肥満、高血圧、高脂血症が少なく、心臓死や脳卒中も少ない。その生理作用は、野菜、大豆、芋などに多いカリウムと共に、神経を穏やかにし、実際、統計的にも心拍数も少なくする。したがって、米と魚、大豆、野菜で暮らした我々の先祖が、和を重んじる日本文化を育てたのは当然ともいえる。その上、大豆や魚を常食する人々では異常な肥満は少ない。これらの食材には食欲を抑制し、脂肪を燃やす成分もあることが分かって来た。今、開発途上国も含め、世界中で肥満の蔓延が生活習慣病を急増させ、深刻な健康問題となっている。大豆、魚、それに日本以外では捨てられている海藻を常食する食習慣やその上世界に類をみない「足るを知る食文化」を世界に広めることが地球上の人と環境の健康のため最も重要な日本の貢献である。

しかし、日本の山は荒れ、田を耕す人は少なく、海の幸も乱獲と汚染で、もはや海は地球の生命を育む場ではなくなりつつある。世界各地の調査をして、日本人の健康長寿のためには、まず小さい島国の山を護り、水を確保し、稲作を盛んにして国土を守り、海の幸を保全することが大切だと痛感する。「食育」は、食教育だけでなく食を育ていのちを育む具体策が必要だ。

自然と隔絶された都市の喧騒の中で生きる夢をなくす若者も多い今日、義務教育終了後の若者に国が支援してでも、一次産業を支える“農業”“林業”

“水産業”や担い手が少ない“伝統産業”，それに高齢者や乳幼児の世話をする“福祉”など好みの仕事に一年間就いて貰うのはどうか。これが日本の自然や一次産業の再生、高齢者や子供の福祉の充実と共に、こうした仕事に生きがいをもつ日本人を育て、美しい活力ある少子高齢社会を築く基盤になるのではと思う。

(やもり ゆきお 元人間・環境学研究科教授
平成13年退官、専門は予防栄養学)

洛書

説得術としてのレトリックの勧め

片柳 榮一

ドイツのデュッセルドルフで催された小さな研究会合に、去年に次いで今年も参加を許された。この研究会は「Body-Soul-Spirit. Regaining a Complex Concept of Human Personhood」という主題で、欧米各国の物理学、生理学、心理学、社会学、哲学、神学などに携わる20人ほどの気鋭の研究者たちが、心身問題について新しいコンセプトを得ようとして開いているものだ。通常の学会と違って、一人の人が20分ほど話して、あと1時間ほどその問題提起に関して徹底して討論するという形式でなされる、極めて知的刺激に満ちた会合であった。学問を討論と対話の中で押し進めるということが、いまもなお日常的になされていることをあらためて知らされた。彼らの説得術の熟練のほどを見せつけられた気がする。そして今一度、ヨーロッパ文化が説得術としてのレトリックを極めて重視する文化であることを思わされた。



我々は「口舌の徒」というような言い方で、レトリックを軽視するところが往々にしてある。自分を顧みると、そうしたレトリックを軽視する姿勢を理論的に根拠づける思想に親しんできたように思う。それを典型的に示すのはプラトンのレトリック批判である。或る限られた時間内で、相手を討論においてうち負かし、賛成多数を獲得することをレトリックは目指す。それに対して哲学が目指すのは、時間に縛られず、真偽を明らかにすることであるという(プラトン『国家』449a)。確かにプラトンの批判はレトリックの問題を衝いている。詭弁を弄するソフィストの横行がプラトンをしてこのような批判に駆り立てたと言えよう。しかし最近になって思うのは、このようにレトリックが尊重されるということは、言論による説得によって最も大事な公の事柄が決定されるという、いわば共和制的(民主主義的)な体制があって始めて可能なことであったということであ

る。帝王一人の裁定ですべてが決められたり、人々の存続に関わることが人々の与り知らぬ所で秘かに決定されてしまうような社会体制においては、レトリックが尊重されることはありえない。その意味でレトリックが尊重される文化伝統は、民主主義の基となるような社会体制によって生み出されたものといえよう。最近そのような意味で、日本の社会の構造変革のためにこそ、レトリックがもっと尊重されなければならないと思うようになっている。

筆者は古代キリスト教思想、殊にアウグスティヌスの思想を長らく研究してきたが、アウグスティヌスはレトリックの達人でもあった。その彼が世俗を離れた晩年に尚レトリックの勧めをして、彼の経験的エピソードを述べている。「私はモーリタニアのカエサレアにおいて、人々に市民的闘技の悪しき習慣を遂に止めさせることに成功したことがあった。これは市民的という以上のものであり、彼らはカテルヴァと呼んでいた。というのも毎年決まった日に何日間かぶつとうして、市民同士だけでなく、近親のもの、兄弟、ついには親や息子までもが二つの組みに分かれ、因習に従い石を投げて闘い合うのであった。そして誰でもが、手当たり次第誰でもを殺したのである。」(『キリスト教的教え』Ⅳ巻24章53節)。彼はこれのおぞましく残忍な古くからの習慣を止めるように言葉の限りを尽くして説得し、ついにこの村落の人々は涙のうちに、長らくの習慣を止めることに同意する。このエピソードはアウグスティヌスが生きた古代末期の現実の荒々しさ、すさまじさを垣間見せてくれるが、またアウグスティヌスがレトリックに何を見ていたかをよく知らしめてくれる。感動的な語り、文章は人を陶醉させる力を持っている。しかしアウグスティヌスは言葉にそれ以上のものを求める。アウグスティヌスは人々との様々な対話の中で、言葉による現実の深い変貌を求め、経験し続けたのである。現代の我々に求められているものも、このように現実を変革しうる力を持ったレトリックであるように思う。

(かたやなぎ えいいち 文学研究科教授、専門はキリスト教)

話題

「アトムサイエンスフェア講演会‘06」を開催

原子炉実験所では、地元自治体(熊取町、泉佐野市、貝塚市)の協力を得て、平成18年12月23日(土)に「アトムサイエンスフェア講演会‘06」を熊取町の「煉瓦館」において開催し、74名の参加があった。

このイベントは、地域住民の方々に研究成果などの情報を広く発信し理解を深めていただくことを目的に、昨年度から実施している。

今回は、「はかる よむ そして年代を知る!」をキーワードに、奈良文化財研究所の光谷拓実年代学研究室長から「年輪から歴史を探る－古代の世界を知るモノサシ－」、原子炉実験所の馬原保典教授から「放射能で時間を計る－太古の地下水のお味は?－」と題した講演が行われ、その後、原子炉実験所の中込良廣教授を司会にパネル討論が行われた。

両講師とも、わかりやすく講演され、特に樹木の年輪、地下水という身近なものが研究対象となっていることから活発な質疑応答が行われた。またパネ



パネル討論の様子

ル討論では両講師の研究上の苦労話などをユーモアを交えて話をされ、笑いもある和気あいの講演会となった。

(原子炉実験所)

訃報

このたび、^{やなぎたせいざん}柳田聖山名誉教授、^{きだ ひでじ}木田秀次名誉教授、^{ふる やてつ お}古屋哲夫名誉教授、^{あさ いけん じろう}浅井健次郎名誉教授、^{いながき ひろし}稲垣 博名誉教授、^{かどた はじめ}門田 元名誉教授が逝去されました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

以下に各氏の略歴、業績等を紹介します。

柳田 聖山 名誉教授



柳田聖山先生は、平成18年11月8日逝去された。享年83。

先生は、昭和23年大谷大学本科を卒業、花園大学助手、講師、助教授、教授および文学部長を経て、同51年4月京都大学人文科学研究所教授に就任された。昭和60年4月から同61年3月には同研究所長、評議員を兼任され、同61年3月に停年により退官、京都大学名誉教授の称号を受けられた。停年退官後は中部大学教授、花園大学国際禅学研究所初代所長、同研究所終身所員を務められた。

先生は、終生、禅仏教の研究に精力を傾けられ、中国日本禅宗史研究の世界的権威として巨大な足跡を残された。先生の仕事は、中国初期禅宗史におけ

る歴史書の研究、中国唐宋期の禅の祖師たちの「語録」と称される文献の研究、禅宗根本典籍の文献学的研究や工具書作成、一休や良寛等の日本の禅者の研究、禅の文化史的研究などから成り、著書は60冊を超え、編著も数多い。本学教授を務められた10年間にわたる講義と共同研究班には、学生はもちろん、外国人の留学生や研究者、禅学・宗教学・中国語学における一線級の研究者、禅を実践している僧侶らが毎回多数出席した。先生の峻厳にして、かつ、からりと闊達な学風とお人柄が人々に与えた恩恵には計り知れないものがある。

これら長年の功績により、昭和56年2月読売文学賞、平成3年4月紫綬褒章、同5年仏教伝道文化賞、同8年11月勲三等瑞宝章を受けられた。

(人文科学研究所)

木田 秀次 名誉教授

木田秀次先生は、平成18年11月13日逝去された。享年64。

先生は、昭和44年4月東京大学理学部を卒業、同大学大学院理学系研究科を経て気象庁に入庁され、気象庁気象研究所研究官、同主任研究官、気象庁予報官、気象研究所研究室長を務められた。平成5年5月には京都大学理学部教授に異動され、同7年4月大学院改組に伴い大学院理学研究科教授に就任された。平成18年3月に定年により退職され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

先生は、長年にわたって気象学・気候学の教育・研究に努められ、特に成層圏物質循環の研究や局地気候の数値モデルによる研究は、高い評価を受けている。また、気候過程に重要な大気－植生－組成の

相互作用に関する多分野連携の研究を組織し推進して気象・気候の研究の新領域の開拓に努めると共に、地球温暖化予測などの社会的最重要課題に対応する研究で世界の先導的役割を果たされていた。

他方、大学や学会運営面での功績も大きい。学内では理学部学生懇話委員として学生との対話に献身され、広報誌「紅萌」の副編集長として本学の広報活動に努められた。学外では、大学入試センター併任教授などとして全国的な大学運営にも貢献されてきたのみならず、(社)日本気象学会の常任理事を長年務めて国内の気象・気候に関する広範な研究活動を指導され、平成18年7月には理事長に就任されたばかりであった。また、国際活動としては、国際学術連合傘下の国際測地学・地球物理学連合／国際気象学・大気科学協会の国内委員会の代表として国際的連携にも努められていた。

(大学院理学研究科)

古屋 哲夫 名誉教授

古屋哲夫先生は、平成18年12月2日逝去された。享年75。

先生は、昭和28年東京大学法学部を卒業され、同大学大学院社会科学研究所修士課程修了後、法政大学講師、国会図書館調査員などを経て、同46年本学人文科学研究所助教授に任ぜられ、同56年教授に就任、日本社会研究部門を担当された。平成6年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

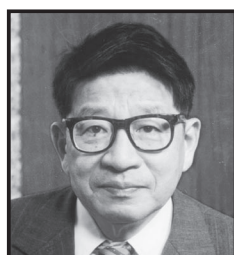
先生は、戦後になって解禁された史料に基づく日本近現代史研究において先駆者として軍事史、議会史、政治社会史、植民地史さらにはアジア認識など多くの研究領域を開拓され、数々の顕著な業績を挙げられたが、その厳密な史料批判による実証的研究方法は国内外の研究者に模範とされている。また本学文学部および同大学院文学研究科において教育・指導に当たられ、さらには人文科学研究所における共同研究を一貫してリードされたことによって多くの研究者を育成された。その結果として、古屋史学に基づく研究方法は、今やひとつの学統を成すに至っている。

先生の研究業績として、まず特筆すべきは近代日本の運命を左右してきた徴兵制や戦争などの実態に初めて人文・社会科学的解剖のメスを入れられたこ

とにある。その解明にあたっては膨大な史料蒐集をもとに綿密な分析を加えられ、そのうえで政治史・外交史・戦史・社会史がひとつの体系としてまとめられている点に特徴があり、昭和41年に上梓された『日露戦争』を始めとして、『日中戦争』(昭和60年刊)など一連の著作は当該分野における必読文献としての声価が定着しており、今後とも時代を超えて長く読み継がれていくべき作品として屹立している。

先生の研究は、この軍事史的研究を基盤として北一輝などの日本ファシズム運動や民衆動員体制についての研究へ、さらには満洲国の国制構造究明や近代日本とアジアとの係わりについての分析へと展開し結実していったが、先生の功績として高く評価されているのは、それが単に個人研究にとどまらず、人文科学研究所における共同研究において常に新たな研究対象を切り拓かれ、自ら率先して新知見を提示され続けた点にある。その成果として『日中戦争史研究』、『近代日本のアジア認識』、『近代日本の東アジア問題』などが編著としてまとめられたが、こうした業績に鑑みると、今日の人文科学研究所の研究体制や研究対象が先生によって礎を築かれたことを改めて痛感せざるをえない。

(人文科学研究所)

浅井 健次郎 名誉教授

浅井健次郎先生は、1月7日逝去された。享年84。

先生は、昭和20年東京帝国大学第二工学部を卒業、京都帝国大学理学部副手嘱託、同助教授を経て、同41年京都大学理学部教授に就任された。

昭和61年に停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。本学退官後、平成3年まで詫間電波工業高等専門学校の校長を務められた。

先生は物理学の分野で、長鎖状分子および分子性結晶の研究から始められ、戦後、新しい素材である高分子の構造と物性の研究を開拓された。巨視的な誘電率の測定と微視的な構造を観察するX線回折・電子顕微鏡を駆使する独自の研究手法によって、高分子に固有な分子運動、相転移、結晶成長の研究を推進され、国内外の高分子研究の拠点となる研究室

を作られた。

昭和43年後半から始まった大学の紛争期に、学生部委員、学生部長として学内問題の処理の重責を担われた。また、二度の評議員として本学の管理運営面で尽力されている。学会活動において、日本物理学会・応用物理学会の理事、日本学術会議の物理学研究連絡委員を務められ、京都で開催された各種の物理学関係の国際会議の現地側責任者の一人として重要な役割を果たされた。

他方、先生は科学者の社会的責任、戦争体験者としての自覚を終生持ち続けられ、83歳の昨年10月、高校生の質問に答える形で戦前の教育についての反省と若者への希望を朝日新聞の投書欄「声」に載せられた。教育改革が重要な課題となっている現在、先生は大学に籍を置く者にも指針を示された。

(大学院理学研究科)

稲垣 博 名誉教授

稲垣 博先生は、1月20日逝去された。享年82。

先生は、昭和21年9月京都帝国大学工学部繊維化学教室を卒業され、京都大学大学院特別研究生修了後、京都大学工学部講師、同化学研究所助

教授を経て、同35年化学研究所教授に就任、高分子物性学研究部門、次いで高分子分離学研究部門を担当され、高分子の物理化学的研究と大学院教育に従事された。昭和63年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、昭和59年4月から2年間、化学研究所所長および評議員として、本学の管理運営に貢献された。本学退官後は、平成元年より

7年間、武庫川女子大学家政学部教授、同4年より3年間、同大学院家政学研究科長を務められた。

先生は、高分子物理化学、特に、高分子の分子特性解析および天然高分子の機能特性に関する研究において数多くの業績を残され、これらの分野の発展に大きく貢献された。主な著書に『Fractionation of Synthetic Polymers (共著)』、『Polymer Separation and Characterization by Thin-Layer Chromatography』等がある。先生はまた、繊維学会会長、財団法人京都国際学生の家理事長などを歴任され、繊維・高分子化学の発展と国際学術交流に貢献された。これら一連の研究教育活動、学会活動、および国際学術交流活動により、平成14年4月勲二等瑞宝章を受けられた。

(化学研究所)

門田 元 名誉教授

門田 元先生は、1月29日逝去された。享年86。

先生は、昭和19年北海道帝国大学農学部農芸化学科を卒業、京都大学農学部助手、助教授を経て同32年食糧科学研究所教授に就任され、同46年

に農学部教授に配置換、水産微生物学講座を担当された。昭和50年5月から同54年4月まで農学部附属水産実験所長を務められ、大学の管理運営に寄与された。昭和59年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は、昭和59年4月から平成2年3月まで近畿大学農学部教授を務められた。

先生は水産微生物学、中でも水域の富栄養化と赤潮原因藻に関する研究において優れた研究業績を残されるとともに、食品保蔵上問題の胞子形成細菌の分析において多大の貢献をされた。主な著書に「海洋微生物学」、「淡水赤潮」等がある。

また、日本水産学会支部長、理事、日本微生物生

態学会会長、国際微生物生態学委員会理事、アメリカ微生物学会名誉会員、アメリカ微生物学学士院会員等の要職を歴任された。これら一連の研究教育活動、学会活動により、平成7年11月勲三等旭日中綬章を受けられた。

(大学院農学研究科)

日誌 2006.12.1 ~ 12.31

- | | |
|---|--|
| 12月3日 名誉教授懇談会 | 15日 人権週間に因む研修会 |
| 4日 役員会 | 18日 役員会 |
| 〃 ベトナム, Mai Trong Nhuon ベトナム国立大学ハノイ校副学長 他1名, 総長他と懇談 | 〃 全学共通教育システム委員会 |
| 5日 部局長会議 | 〃 ドイツ, Hans Joachim Daerr 駐日ドイツ連邦共和国特命全権大使 他3名, 総長他と懇談 |
| 8日 総長, 日中大学学術フォーラムのため, 中国を訪問(10日まで) | 19日 教育研究評議会 |
| 〃 学生部委員会 | 20日 国際交流委員会 |
| 11日 役員会 | 22日 外国人研究者との交歓会 |
| 〃 キャンパスミーティング(生命科学研究科) | 25日 役員会 |
| 12日 総長ランチミーティング(文学研究科) | 26日 企画委員会 |
| 14日 能楽鑑賞会 | 〃 大学入試センター試験実施委員会 |
| 15日 本部消防訓練 | 28日 財務委員会 |

お知らせ

眼で学ぶ, 絵で教える 京都大学所蔵 近代教育掛図展

京都大学所蔵近代教育掛図(大学院人間・環境学研究科総合人間学部図書館所蔵の旧制第三高等学校旧蔵分, 総合博物館所蔵分あわせて356点)は, 第三高等学校のルーツにあたる阪府洋学校(明治2年に大阪で開校)や大阪英語学校(明治7年開校)で使用の掛図から太平洋戦争期の掛図まで, 地形図, 地質図, 作戦図, 動植物図, 古生物図, 周期律表, 有職故実図, 年表, 解剖図など文系理系の幅広い分野にわたっています。

本展示では, この一大コレクションから精選した掛図65点および関連資料を通して, 近代日本のエリート教育の内実, それを支えた国の政策, 時代背景を探るとともに, 近代印刷技術の歴史にも光をあてます。東アジア諸国および世代間における歴史の共有のために, また日本近代化の光と影について国際的理解を得る上で貢献できれば幸いです。

1. 会 期: 2月7日(水)~ 3月18日(日) 9:30~16:30(入館は16:00まで)
休館日 月曜日・火曜日(平日・祝日にかかわらず)
2. 会 場: 京都大学総合博物館 本館2階企画展示室
3. 入 館 料: 一般 400円, 大・高校生 300円, 中・小学生 200円
4. そ の 他: 主催 京都大学大学院人間・環境学研究科, 共催 京都大学総合博物館



関連事業 京都大学所蔵 近代教育掛図展 特別講演

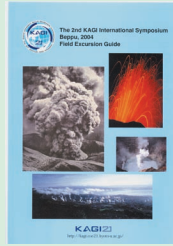
1. 日 時：3月11日(日) 14:00～
2. 場 所：京都大学総合博物館 南棟2階 企画展示室
3. 講 師：塚原 晃 (神戸市立博物館学芸員)
「近代教育掛図～明治の海図を中心として」
ルーカス・ビルサク (Ed. ヘルツェル社社長)
「ウィーンの石版出版者Ed. ヘルツェル」(英語, 通訳付)
4. 参 加 費：無料(博物館の入館料が必要)・申込不要
5. 問い合わせ先：京都大学総合博物館
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
TEL: 075-753-3272 FAX: 075-753-3277
URL: <http://www.museum.kyoto-u.ac.jp/indexj.html>

平成18年度防災研究所研究発表講演会

1. 日 時：3月5日(月) 9:20開会
3月6日(火) 9:00開会
2. 会 場：京都テルサ(京都市南区東九条下殿田町70番地) JR京都駅から南へ徒歩10分
3. 参 加 費：無料
4. プログラム：

3月5日(月) 9:20 開会の辞 特別講演 9:25-12:40 9:25 震源を観る 10:10 地すべりダイナミクスの発展 11:10 海岸災害と港湾水工学に関する私の研究活動を振り返って 11:55 水文学から水資源研究へ 災害調査報告 14:00-15:00 14:00 2006年7月17日西ジャワ地震と津波 14:20 2006年2月フィリピン・レイテ島地滑り災害における社会的対応 14:40 平成18年7月豪雨による九州南部の水害 ゲスト講演 15:00-15:30 15:00 砂防の動向とそれに対する科学的技術的支援 一般講演 15:40-19:10 3月6日(火) 一般講演 9:20-11:35・14:00-17:00 ポスターセッション 9:00-17:00 発表 11:30-14:00	防災研究所長 河田 恵昭 防災研究所教授 梅田 康弘 防災研究所教授 佐々 恭二 防災研究所教授 高山 知司 防災研究所教授 池淵 周一 防災研究所教授 James Mori 防災研究所助教授 矢守 克也 防災研究所助教授 川池 健司 大学院農学研究科教授 水山 高久
--	--
5. 問い合わせ先：京都大学宇治地区事務部研究協力課
E-mail: uji.sien@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp TEL: 0774-38-3352 FAX: 0774-38-3369
詳細はホームページをご覧ください。 <http://www.dpri.kyoto-u.ac.jp>

隔地施設 紹介



理学研究科附属地球熱学研究施設 (<http://www.vgs.kyoto-u.ac.jp/>)

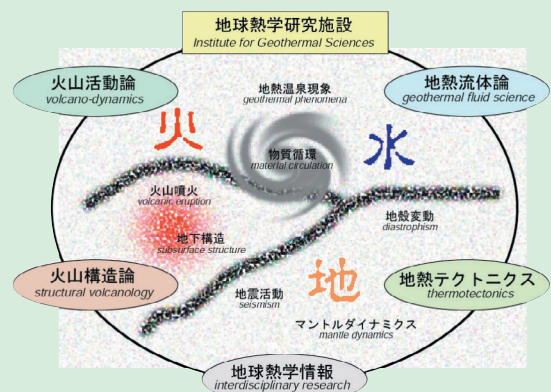
地球熱学研究施設は、旧地球物理学研究施設(大分県別府市：大正13(1924)年設立)と火山研究施設(熊本県阿蘇郡：昭和3(1928)年設立)を統合し、「地殻表層からマントルに至る熱構造・熱現象の研究と教育」を目的として、平成9(1997)年に発足しました。別府の施設を本部とし、阿蘇は火山研究センターと呼称しています。敷地・建物は旧2施設を受け継ぎ、新たに観測機器・分析機器等を導入しつつ、設立(設立者：志田順博士)以来の火山・温泉・地熱に関する総合的研究を含んだ新たな展開を進めています。

教職員は、別府と阿蘇の2ヶ所に分散していますが、専門分野の異なる研究者の協力体制を企図して大部門制としています。「地球は、内部の熱エネルギーを地殻変動、地震活動、火山活動、地熱温泉活動などの地球表層現象に変換する巨大熱機関である」との認識のもとに、また地の利を生かして中部九州の野外観測・調査・実験を中心に、地球熱的活動に関しての総合的な地球科学研究を推進することを目指しています。この際、施設が位置する中部九州はその「巨大な実験装置」とみなすことができます。

研究分野として、地熱流体論(地熱流体の起源と循環、地熱流体によるエネルギーと物質輸送過程)、地熱テクトニクス(火山・地熱・温泉現象の発達過程とテクトニクスとの関連)、火山構造論(火山・地熱地域の力学的・熱的・水理的構造、マグマの発生と挙動)、火山活動論(火山活動と地球科学的諸変動との相関、火山噴火予知に関する基礎研究)の大きな4分野とともに、昭和62年以来継続してい

る外国人客員部門(地球熱学情報部門：地球熱学に関する情報の交換・蓄積、国際共同研究の推進)を有して、国際的な展開を図っています。設立後約90年の間には、阿蘇の大噴火の貴重な記録収集や地下マグマの活動状況を明らかにし、平成2年からの雲仙普賢岳をはじめとして日本各地の活火山調査研究にも携わってきました。別府では、温泉地である地の利を生かし、地下の地熱流体の流動や性質に関する貴重な調査研究成果をだすとともに、現在はガス・水・岩石の高精度分析を実施しています。また、日本では特異なテクトニクスである九州中部域の地溝の形成に関連しての新たな枠組みを提案してきました。昭和62年からほぼ毎年来日する外国人客員研究者は遠隔地施設である当施設の構成員や学生へ大きな影響を与え、国際的な交流に大きな貢献をしています。

施設を構成する2拠点(別府と阿蘇)は、100 kmほど離れており、その連携を密にするため、毎月1回の合同会議を交互に開催し、毎週のセミナーをテレビ会議システムを利用するなど工夫をこらしています。このテレビ会議システムは吉田キャンパスの地球物理学教室・地質学鉱物学教室とも連携でき、京都でのセミナー等でも大きな貢献をしています。



平成15年から開始された21世紀COEプログラム、並びに、平成16年の国立大学法人化は遠隔地施設としての地球熱学研究施設に大きなインパクトを与えました。21世紀COEプログラムでは、「プレート収斂域における水・熱フロー」をキーワードに、余田成男教授(地球惑星科学専攻)を代表とする「活地球圏の変動解明」(KAGI 21)の重要な研究対象・研究フィールド・教育フィールドを有する施設として京都との研究・教育上の関係がより密接になってきました。第2回活地球圏国際シンポジウム(平成16年)を別府で開催したのも重要な成果です。また、現在地球科学研究で不足しがちな地球科学現象の観測・観察・解析というリアリティに富む現地教育において、KAGI 21の「多目的観測サイト」の中心として実習プログラムや実習・実験マニュアルの充実が着実に進んでいます。そのため、京都から多くの院生・学生・教員が訪れるようになり、施設の存在が意識されてきたことは特筆されます。学生実習の感想文は実際の自然にふれることの喜びや、観測・分析することから大きな地球規模の循環までのストーリーを実感できるというコメントが多く見られるのも楽しいことだと感じています。また、多目的観測サイトの活動として取り組んだ標準的岩石のデータベースは、KAGI 21のホームページで公開され、地元の先生方や分析試料が必要な研究者へ情報を提供しています。

「京都大学の窓」としての隔地施設の役割を認識して、研究施設を利用した施設公開はすでに6回を数え、さらに高校生を対象としたプログラム、教員研修プログラムなどを実施して、着実な成果をあげています。たとえば、施設公開では、火山やマグマ、温泉に関わる種々の実験が非常に好評を博していますし、地元ならではの火山防災や地震防災の紹介や地域の岩石の展示も含めて、楽しみにしている方が増えています。また、現地に出て、地獄地帯や活断層、湧水などを見学する「夏休み地獄ハイキング」は参加者からつらいが楽しい試みとして評価されています。それらの成果は合併後に編集を始めた毎年のアニュアルレポートに詳しく記載・報告しています。火山研究センターのホームページでは、最近の阿蘇火山や火山研からの映像を得ることができます。これらの情報は、京都大学の窓として市民が遠隔地施設を感じていただけるサービスの一環として貴重なものとなっています。

また各教職員は、両拠点が位置する別府や阿蘇の自治体がかかえる課題である火山噴火予知や温泉資源保護、地震被害想定などの委員として重要な役割を果たしていることも特筆されることです。



別府での観測・実習風景

地球熱学研究施設(本部)

住 所 大分県別府市野口原

電 話 0977-22-0713

地球熱学研究施設火山研究センター

住 所 熊本県阿蘇郡南阿蘇村

電 話 0967-67-0022

職員構成

別府：教員 5, 技術職員 1, 教務補佐員 1

事務職員 2, PD 研究員 5

阿蘇：教員 6, 技術職員 2,

事務職員 1, PD 研究員 1



施設公開の様子

アクセス

- ・別府：大分空港からリムジンバスで40分・J R 別府駅からバス約5分
- ・阿蘇：熊本空港から特急バス約30分・J R 立野からタクシー約10分